

小学校図画工作科の学びを豊かにする授業の創造

—教科の独自性を生かした東雲小学校の授業実践を通して—

三 桝 正 典*

(2019年1月9日 受理)

Creation of the Class to do Learning of the Elementary School Drawing and Handicrafts Department Rich

—Through the Class Practice of the Shinonome Elementary School
which Kept the Originality of the Subject Alive—

Masanori MIMASU*

This study suggests the way of drawing and manual art department wealthily through the educational practice the teachers Shinichi Amano works on Shinonome meeting (2018) for the study of the Shinonome Elementary School.

Keywords: Class to make learning rich 学びを豊かにする授業, Molding environment 造形環境, trial and error 試行錯誤

はじめに

平成30年11月17日（日）小中共同研究テーマ「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育むための学びを豊かにする授業の創造～教科等の独自性を生かした東雲がめざす授業の方向性～のもと、東雲教育研究会が実施され、各教科の独自性を生かした手立てが提案されていた。筆者も図画工作・美術科の共同研究者として参加させていただいた。東雲教育研究会図画工作・美術科の公開授業の特長は、「鑑賞」を共通の基礎教材とし、小学生の低学年から高学年、そして中学生と義務教育の9年間の変化と成長を見ることができる所にある。今回は小学生低学年では「ブリューゲル」高学年では「表現が個性的な7人の画家」中学生2年生では「岡本太郎の太陽の塔」を鑑賞教材として展開させていた。図画工作科・美術科の基本理念は以下のように述べられている。

図画工作や美術を学ぶということは、単に描いたりつくったりするための知識や技能を身につけることではない。様々な試行錯誤を楽しみながら、自分にとって価値あるものをつくり出していく創造的なプロセスを通して感性を開拓し、磨きをかけ、さらに豊かな情操へと高めていくことにこそ、その学びの意義を見出すことができる。リード (herbert Edward Read, 1893-1968) の言う「美術による教育 (education through art)」が東雲図画工作科・美術家の基本理念である¹⁾。

* 広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科教授

本論文では、上記の基礎理念のもと東雲小学校図画工作科天野紳一教諭の教材研究と授業実践を通して図画工作科の独自性を生かした東雲が目指す授業の方向性を提案することが出来ればと考える。

東雲図画工作科・美術科の目的

東雲図画工作科・美術科では、昨年度、「学びが豊かになっている」とは「自分らしい表現に向かって次々と発想が生まれ、また新たな発想へと連鎖していく姿」が「自分らしい発想が生まれ、連鎖している」状態であると考え、発想を中心に児童・生徒の学びを取り巻く環境に重点を置いた実践を試みた。本年度は、昨年度の研究から、より自由で豊かな発想を引き出すためには、「試行錯誤」のプロセスが不可欠であるとの結論に至り、「思考のゆらぎ」をキーワードに児童の「思考のゆらぎ」を引き起こし、試行錯誤を活性化させる学習展開を取り入れた実践を通して学びを豊かにするための授業デザインのあり方を探っていくことを本年度の目的とした。

9年間で目指す子ども像

東雲図画工作科・美術科では、9年間を通して育てたい子ども像を次のように設定している。

- ①自分らしい感性に基づいた審美眼をもつ、
- ②身の回りのさまざまな対象や環境に主体的にはたらきかけながら美的体験を享受する
- ③表現することを楽しむ

研究会紀要では、子ども像の設定について以下のように説明されている。

自分らしい感性に基づく審美眼とは、「美しいものを美しいと感じる心のアンテナ」のことである。ここでいう「美しいもの」とは、児童・生徒個々の美的体験を通して熟成された感性、価値観に基づいて判断されるものである。従って一般的な「美」の範疇に止まらない多様性をもち、新たな美的体験や他の価値観との出会い、そこで生まれる対話など協働的な営みを繰り返しながら広がり、深まる。身の回りのさまざまな対象や環境に主体的にはたらきかけるとは、「自分らしい感性」を大切にしながら自分を取り巻く環境とそこに潜む「美」を興味深くもって見つめ、見出し、主体的に関わりようとする態度のことであり、様々な素材や表現方法と出会いながら展開される造形活動の経験や鑑賞の学習を通して培われる。ここまで述べたことが美的体験の吸気（*inspiration*）にあたるとするなら、表現することを楽しむことは、まさに呼気（*expiration*）である。表現の欲求は人が生来もっている根源的な欲求の一つであり、それが満たされることで日々のくらしはより豊かになるはずである。呼吸するように、鑑賞と表現とを柔軟に取り入れた学習活動を通して、生涯に渡って主体的に「美なるもの」に親しむ人間を育てることが東雲図画工作科・美術科の共通の目的である¹⁾。

天野の授業は、常にその「主体的に美なるものに親しむ人間を育てる」ことを具現化させている。それは、彼自身が「心のアンテナ」を持ち題材と対峙しているからである。その一つが図工室の造形環境である。教室に入ると同時に「美なるものに親しむ」視点をいくつも設定している。若元（2000）は、美術教育における造形環境の「場の環境」において可視環境と不可視環境にふれ、

その大切さを以下のように述べている。

美術教育において欠かせない造形環境は二つある。その第一は可視環境であり、第二は不可視環境である。第一の可視環境は、①場の環境、②材料環境、③用具環境を内包し、第二の不可視環境は、①人的環境、②時間環境、③情報環境を含んだものである。各々の詳細は次の項に譲ることとし、最後に「環境が人をつくる」を再認識したのと同等のレベルで「人が環境をつくる」という筋道も確認し、教育環境の整備は教師の不可避の課題であり、よい造形環境が準備されたときはじめて、よい美術教育が具体化される²⁾。

今回の公開授業においても「美なるもの」を感じる造形環境、特に用具環境においては目を見張るものがある。下図1・2は、授業前に準備された用具環境であるが、教室に入る児童のワクワク感をその設置の形を見ても感じ取ることができる。



図1 用具環境風景（紙類）



図2 用具環境風景（筆記・筆類）

研究授業の実際

「学びを豊かにする授業」の題材として今回天野が取り上げたのが、様々な技法を感じる抽象的な「鑑賞材（名画）」5点。今回の研究のキーワードである「思考のゆらぎ」を表現や鑑賞のプロセスの中で繰り返される「自問自答」とそれに伴って展開される「試行錯誤」に重ねている。先ず5点の中から選んだ1点の作品をしっかりと鑑賞させ自分なりにトリミングし、焦点化した部分から作家の特徴的な筆触や色使いを探り、自分の表現へと移行させて行くところにより、天野独自の作家の思いや意図に迫るアクティブな鑑賞を取り入れているのが特徴的な授業構成である。自分の選んだ作家の技法や画風を使った抽象表現を行い、その技法や画風から感じる様々な思いを感じ合うことで鑑賞の視点を広げたり、深めたりしているのも天野らしい展開を見せている。実際の公開授業では、鑑賞と表現を常に行いながら、児童一人一人が「思考のゆらぎ」の試行錯誤を繰り返すことによって、発想の連鎖を生み出す授業デザインの在り方を探っている。またそれは新学習指導要領に示された

〔共通事項〕（１）「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

- ア 自分の感覚や行為を通して、形や色などの造形的な特徴を理解すること。
 - イ 形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもつこと。
- にも対応できるように構成されている。以下学習指導案。

図画工作科学習指導案³⁾

指導者 天 野 紳 一

日 時 平成30年11月17日（土） 第2校時（11：05～11：50）

年 組 小学校第6学年1組 計32名（男子16名 女子16名）

場 所 小学校図工室

題 材 THIS IS MY STORY ～あの画家の表現の向こうに

題材について 題材設定理由と概要

表現や鑑賞のプロセスの中で繰り返されるす自問自答とそれに伴って展開される試行錯誤は、その児童なりのストーリーのもとに浮かんで消え、また浮かぶ発想の連続である。着想から作品の完成（あるいは自分なりの作品解釈）までの思考の道程は迷いのない一本道ではなく、多くの場合“ゆらぎ”の様相を呈する。自分らしい表現や鑑賞の有り様を問いつけるこのようなプロセスにこそ図画工作科の学びの本質があると考え、試行錯誤の活性化を図るために本題材を設定した。

児童はまず「色使い」や「筆触（タッチ）」に特徴をもつ画家たちの絵画作品を鑑賞し、それらの中から自分の表現に生かしてみたい、取り入れてみたいと思う作風を選ぶ。そして、実際にその色や筆跡を再現するための試行錯誤を通して画家の表現の秘密を探っていく。「再現」という行為は、謂わばその画家になりきる疑似体験であり、技法のみならず表現者としての想いや意図にまで迫るアクティブな鑑賞が可能になるものと考えている。題材の終末では、自分なりにつかみ取った画風を用いた抽象絵画にチャレンジし、その表現に込められた想いや意味を互いに伝え合うことで鑑賞の視点のさらなる拡張をねらう。鑑賞者と表現者、双方の立場を行き来しながら試行錯誤を繰り返す、学習指導要領の共通事項【(1) ア, イ】に示された内容に迫ることのできる題材である。

児童の実態

本学級の児童は9月に水墨画を題材とする学習に取り組んだ。現代水墨画の抽象作品に題名をつけることを通して「かすれ」「にじみ」「濃淡」といったモノトーンのバリエーションで表現された造形的イメージと言葉とを結びつける活動を行った後で、自由に墨と遊んでみる時間をもった。この時多くの児童は、筆以外にドリップングやマーブリングなどのモダンテクニックも積極的に取り入れながら墨のもつ多様な表現の可能性を探るための試行錯誤に没頭した。結果として残された試作品（一人当たり7～8枚）から選んだお気に入りの1枚に自分なりの題名と簡単なキャプションを添えて作品化し、展覧会形式の相互鑑賞を行うことで題材を締めくくった。

美的認知の発達が「何が描かれているか」から「どのように描かれているか」へと推移していくものであるなら、児童が正体のわからない抽象作品を鑑賞する際にまず行われるのが「〇〇に見える」という見立てである。題名をつける際の児童の思考もまず具体物への見立てから始まった。そこで、「〇〇に見えるんだね。じゃあ、そこでどんなことが起きているの?」「その〇〇を君はどんな気持ちで見ているんだろう?」「その〇〇は君にとってどんな意味を持っているのかな?」など、

“見立ての先”へとイメージを広げる問いかけをしたところ児童は次のような題名を考え出し、添えられたキャプションには図1、図2の作品例と同様にその児童なりのストーリーが展開されていた。

あの日を思い出す 海の中の炎 舞い上がる ミジンコの目線 アイネクライネ 闇の始まり 冬に咲く花火 後の祭り 蘇る光 ど真ん中の一発 どこかへ
--

これらの様子から、水墨画のシンプルで抽象性の高い造形要素を言葉に置き換え、自分なりの意味づけをしながら自由にイメージを膨らませていく児童の姿が浮かんでくる。

学びを豊かにするための手立て

(1) 鑑賞材の選定

題材のねらいと再現、活用へと向かう児童の活動を踏まえ、次の条件に照らして鑑賞材を選定した。

- ①筆触、色使いが特徴的でわかりやすいもの
- ②具象性、写実性がそれほど高くないもの（細かな輪郭線が描かれていないもの）
- ③主題やイメージが限定的でないもの（鑑賞者による自由な解釈が可能なもの）

児童はこれら6枚の作品（A～F）の中から、それぞれの興味・関心に基づいてお気に入りの1枚を選び、鑑賞を深めていくことになる。

(2) 焦点化のためのトリミング

絵の全体的な印象や主題ではなく技法そのものに焦点化し、より分析的に鑑賞することができるよトリミングシートを用意する。絵のどの部分を選択するかということについては、児童が主体的に判できるようにしたい。模写のように絵の構図や詳細なモチーフを含めた再現をめざすことは容易ではなく、時間も労力もかかるが、トリミングによって範囲を絞り込むことで、描画技能に自信のない児童短時間で試行錯誤を繰り返しながら目標に迫ることが可能になるはずである。

(3) 多様な試行を可能にする材料・用具

水彩絵の具、アクリル絵の具、パステル、クレヨン、色鉛筆といった描画材。大小様々な筆、竹串綿棒、ストローなどの道具。画用紙、和紙、版画用紙、ベニヤ板など、児童が思い思いに試すことのできるような材料や用具を準備する。特に用紙については名刺サイズのを多数用意することによつて試行錯誤を促すとともに、うまくいったもの、いかなかったものを含め試作はすべてストックし、探のプロセスを残すようにする。このプロセスこそ、自分の選んだ画家の表現に近づくためのその児童りのストーリーであり、抽象表現に取り組む際にも手元資料として活用できるはずである。

(4) 抽象表現を引き出すキーワード（※本時の手立て）

題材の終末で児童はそれぞれ自分の追求した画風を用いた抽象表現にチャレンジするが、表現のきっかけとなるテーマはキーワードの形でランダムに与えることとする。このキーワードについては、具的なフォルムと直結しない概念から選びたい。例えば「風」「音」「温」「冷」のように視覚以外で感取るもの、「喜・怒・哀・楽」など感情に関するもの、「愛」や「平和」といった普遍的な概念などである。この時児童は、「自分がこの画家だったらこのテーマをどのように表すだろうか」と思考

することになる。児童の実態で紹介した水墨画の題材とは逆の思考となるが、言葉のもつイメージと画面に表れた造形要素とを結びつけた経験がここで生かされるものと考えている。本時の後半では、自分と同テーマで描かれた作品はどれかを探し求める形で相互鑑賞を行う。8種類×4枚のキーワードを用意するので、自分以外にも同じキーワードで描いた仲間が3人いることになる。同一のテーマであっても分とは異なる表現の仕方があることに気づいた時、児童の思考はまた新たなゆらぎを見せるであろう。

指導目標

- 1 筆触や色使いに特徴をもつ画家の作品と出会い、その筆触や色を再現しようと試行錯誤する中で析的に鑑賞を深めるとともに、技法の成り立ちやそれがもたらす効果などについて自分なりに推測したり、理解したりできるようにする（知識及び技能）。
- 2 その画家ならではの筆触や色使いといった表現の特徴を再現するためには、どんな画材や用具をどのように使えばよいのかを考え、試行錯誤を重ねながら自分なりに判断するとともに、そこで見つけ出した方法を自分の表現にいかすことができるようにする（思考力・判断力・表現力等）。
- 3 その画家独特の表現に親しみをもち、それを再現したり、自分の表現に取り入れたりすることのしさを味わうとともに、自他の作品をじっくり鑑賞し、それぞれの表現が多様であることのよさに気づくようにする（学びに向かう力・人間性等）。

指導計画（全5時間）

- 第一次 様々な画風との出会い（鑑賞）…………… 1時間
 第二次 画風の再現（表現）…………… 2時間
 第三次 抽象表現と相互鑑賞（表現⇄鑑賞）（本時は2/2）…………… 2時間

本時の目標

キーワードのイメージを自分の掴み取った画風を生かして抽象的に表現するとともに、同じキーワードから多様な表現が生まれることのよさやおもしろさに気づくことができる。

準備物

多種多様な画材（絵の具、クレヨン、色鉛筆、筆、竹串、綿棒、画用紙、和紙、ベニヤ板など）
 試作のプロセスをストックした資料、抽象表現のためのキーワード、キャプション用のカード。

学習の展開

学習活動と内容	指導上の留意点（◆評価）
1 学習課題を把握する（5分）	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 抽象表現の世界を楽しもう～君の描いた〇〇風の『 』と出会う。 </div> <p>□本時の学習の概要を知る。</p> <p>①抽象作品を完成させる。</p> <p>②作品を解説するキャプションカードを書く。</p> <p>③互いの作品を鑑賞し、同じキーワードを選んだ仲間を探す。</p>	<p>○学習内容への興味・関心、期待を引き上げ、内容を概観できるような課題設定を行う。</p> <p>○学習の流れについては、予め板書しておく。</p> <p>○児童の意欲を高めるために、自由に試行錯誤ができる環境を整えておく。</p> <p>・多様な材料、用具の準備。</p> <p>・製作に没頭できるような機の配置。</p>

<p>④選んだ理由について交流する。 ⑤キャプションカードを互いに公開する。</p> <p>2 製作の続きを行う (15分). □前時の続きの製作を行い、作品を完成させる。 ・与えられたキーワードのイメージを自分の選んだ画風の特徴を生かしてどのように表現するか、試行錯誤を通して判断し、表現する。</p> <p>3 キャプションカードを書く (5分). □自分の選んだ画家の立場で、作品を解説する。 ・自分の選んだ画風とキーワードのもつイメージとのつながりが伝わるように表現する。</p> <p>4 自分と同じキーワードを描いた仲間を探しながら、自由に鑑賞して回る (10分). □筆触や色使いといった表現の特徴とキーワードのもつイメージとのつながりを探る。</p> <p>5 交流する (10分). □自分と同じキーワードをもとに描かれたと思う作品について、根拠とともに紹介し合う。 ・自分とは異なる表現のおもしろさやよさに気づく。</p>	<p>○児童の製作の様子を見守り、適宜助言したり、話し相手になったりしながら、発想の喚起を促す。 ・失敗ややり直しにも対応できるようにする。 ◆自分の選んだ画風とキーワードのイメージとの結びつきを考えながら描いているか (作品)。</p> <p>○その画家になり切り、自分の表現の特徴や意図を他者に伝える意識をもって書くよう助言する。 ・次の相互鑑賞 (仲間探し) に備えて、互いのキャプションの内容は秘密にしておくよう伝える。 →書き終わったら作品の下に置く。 ◆画家の立場で自分の画風とキーワードとの結びつきを考え、言葉にできているか (記述内容)。</p> <p>○8つのキーワードを明かし、同じキーワードを描いた仲間が自分以外に3人いることを伝える。 ・自分の表現をベースに、筆触と色づかいに注目してキーワードとの繋がりを考えるよう助言する。 ※キーワードが何であるかはこの活動が始まるまで伏せておく。</p> <p>○なぜ自分と同じキーワードを描いた作品だと感じたのか、必ず根拠を伝え合うよう助言する。 ・「正解探し」ではなく、多様な感じ方や表現方法の存在に気づくことに価値があることが伝わるよう、共感的な立場でファシリテートする。</p>
---	---

考察

研究会での公開授業のねらいは「THIS IS MY STORY ～あの画家の表現の向こうに」。指導目標は、「キーワードのイメージを自分の摘み取った画風を生かして抽象的に表現するとともに、同じキーワードから多様な表現が生まれてくることのよさやおもしろさに気づくことができる」。指導計画全5時間の内の最終5時間目、天野の思いの詰まった教室展示と道具、そしてそれぞれの児童が摘み取った画風の作品が授業前の個々の机の上に並べてあり、その教室空間だけでもすでに天野の授業に引き込まれていく感じがした。前時までの製作を映像と共に振り返えさせ、与えられたキーワードのイメージを自分の選んだ作家の画風の特徴を生かしてどのように自分なりの世界を表現するかという本時の展開。とにかく目を引いたのが、様々な画風と出会い、個々に摘み取った画風を再現した小作品群である (図3)。どの児童も画風の再現に対する試行錯誤が見られ、一つの完成作品といっても過言でない深さが表現されているように感じた。また天野の多様な試行を可能にした材料や用具環境の成果の一端を垣間見ることができる。



図3 個々に摘み取った画風を再現した小作品

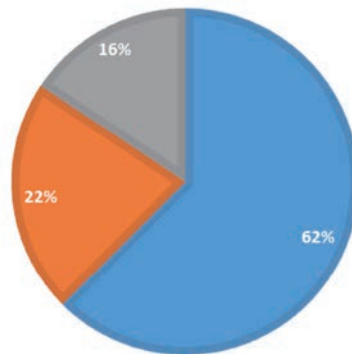
多様な試行を行った後、研究会当日、天野から提示されたキーワード「風・幻・記憶・音・眠・光」を基に抽象的な表現に向かわせた。キーワードに対しても児童は試行錯誤し少しずつ取り組み始めていた。一人一人の児童の取り組みからこれまでの多様な試行の表現活動が生かされている事を感じた。研究授業では、抽象的な表現活動の途中で終了したが、その後の今回の題材終了後、天野を訪ね、完成作品を見せて頂いた。天野は児童の完成作品に至るまでの制作過程について以下のよう述べている。

時系列でどんどん自分の思いや表現が実現していくことばかりではなく試行錯誤の活動を続けて行く中で「結局これが良い」と言って元に戻った児童が今回の題材の過程の中で多く見られた。また過程の中に完成として求めるものを見つける場合もいくつか見られた。このことは色々試してみても思うようにいかなかった経験もストックすることによって自分の制作過程をしっかりと見ることが出来た成果ではないかと思う⁵⁾。

今回の題材の完成作品では、最終的に「最初の模写技法に戻った」児童は全体の62%、「全く違う表現になった」16%、「どちらも判断できない」22%であった（表1）。

表1 完成作品の表現方法について

■最初の模写表現に戻った ■どちらとも判断出来ない ■全く違う表現になった



天野の授業の展開で興味づけられるのが、最終的な完成作品に児童を向かわせている過程で「今までの個々に摘み取った画風を用いて製作しよう」ではなく新たにテーマを与えてそこから繋がるものを制作しよう」としたところにある。それによってさらに試行錯誤が広がり、様々な表現へと繋がったのではないかと思える。まったく今までとは違う表現で完成させた作品についても、今までの過程のなかで何か気づき、掴んで自分の表現にしていると評価している。今回の研究のキーワードである「思考のゆらぎ」の成果がいたるところに見られた実践であった。1枚の画用紙に絵



図4 児童完成作品

を描き進めていく制作活動では取り戻せないゆらいでゆらいだ結果の後、選択肢が残っている授業展開は、色々な題材や評価活動にも活かしていけるのではないかと思える。更なる展開に期待しながら引き続き天野の授業を見続けていきたい。

引用文献

- 1) 天野紳一他 『平成30年度東雲教育研究会実施要項』広島大学附属東雲小学校 2018
- 2) 若元澄男「造形環境」『図画工作・美術科重要用語300の基礎知識』明治図書 2000 p. 200
- 3) 天野紳一他 「鑑賞活動にかかわる児童・生徒の具体的な様相」『平成28年度教育研究初等教育』広島大学附属東雲小学校 2017 p. 168
- 4) 天野紳一 インタビュー 広島大学附属東雲小学校にて 2019.1.30

参考文献

- 天野紳一他 『平成30年度東雲教育研究会実施要項』広島大学附属東雲小学校 2018
- 三樹正典 「小学校図画工作科の学びが豊かになる用言・鑑賞活動に関する一考察」『幼児教育心理学科 研究紀要 第4号』広島女学院大学 2018
- 上野行一 『私の中の自由な美術—鑑賞養育で育む力—』光村図書 2011